

# 被災地の親子に寄り添って

## －震災から3年目、浸水地域での子育て支援の取り組み－

宮城野区保健福祉センター家庭健康課  
河野理和子 小笠原江理 百々文香  
高橋雅子 庄子俊江 鈴木由美

### 1. はじめに

平成23年3月11日におきた東日本大震災で宮城野区は最大震度6強を記録し、区の面積の3分の1が津波で浸水するなど甚大な被害を受けた。津波浸水地域では、日頃子ども達が利用している幼稚園や保育所、児童館、小中学校も被害を受けた。当家庭健康課では震災直後から現在に至るまで、子ども達、その親、地域の子育て支援者を見守り、支援してきた。津波浸水地区担当保健師として地域に出向くと、生活面、精神面に不安を抱えている人はまだまだ潜在していることを感じる。今回は震災後3年をむかえる親子の実情と、浸水地域での子育て支援の活動を報告する。

### 2. 高砂地区の概要

(表1)

高砂地区の子育て機関や応急仮設住宅の状況は表1のとおり。

### 3. 震災後の子育て支援の経過

(1) 震災直後(平成23年3月)から震災直後から宮城野区保健福祉センター保健師は、庁内での電話相談や窓口相談、津波により紛失した母子手帳の再交付等を行った。全国から応援を

頂きながら、避難所での健康相談や浸水した地域をローラー作戦で全戸訪問するなど、被災者支援を早急に行った。しかし、避難所や浸水地域の訪問で母子に会うことはできず、状況をつかめないでいた。他区の保健師の応援をもらいながら、平成23年5月に幼児健診を再開し、母子の状況を確認できた。受診率は震災前に比べ、大きく低下することではなく、「実家に帰っていた」「友人宅を転々としていた」等震災後の母子の状況を把握することができた。同時に、地域の保護者は通常の保健福祉サービスを求めていたことや幼児健診への期待も感じられた。

平成23年8月から幼児健診時に、仙台小児科医会の協力のもと、子どもと保護者に対する【こころとからだの相談問診票】を対象者全員に使用し、診察・保健指導を行った。保健師は問診票をもとに保護者の話を聞き、対応に悩む症状をもつ相談に対しては、かかりつけ医の受診や

#### 高砂地区の概要

##### 1. 高砂地区の子育て支援機関

〈子育て支援機関(高砂浸水地区/高砂全域/宮城野区)〉

幼稚園	(2ヶ所/7ヶ所/19ヶ所)
保育所	(2ヶ所(支援室)/8ヶ所/29ヶ所)
児童館	(4ヶ所/7ヶ所/19ヶ所)
子育てサロン	(1ヶ所/5ヶ所/16ヶ所)
小学校	(3校/7校/21校)
中学校	(1校/3校/10校)

##### 2. 応急仮設住宅状況(H25年10月現在)

プレバブ仮設住宅	402世帯(宮城野区)
民間賃貸住宅	2,218世帯(宮城野区)

(表 2)

**震災直後からの高砂地区の子育て支援**

- 23.3 月 浸水地域ローラー作戦による全戸訪問、避難所健康相談を実施
- 23.5 月 幼児健診再開  
(同時進行で避難所、浸水地域、仮設訪問)
- 23.8 月 子どものこころの相談問診票を健診時に導入(全市)  
児童精神科医によるこころの相談室を月2回実施  
(宮城野区、若林区、はーとぼーと)
- 24.1 月 高砂地区子育てネットワーク会議
- 24.3 月 社協主催 浸水地域対象  
「お茶っこ交流会」に  
パパママサロン同時開催

【子どものこころの相談室】を勧めた。

【子どものこころの相談室】は、同じ8月から日本児童青年精神医学会の先生方にご協力を頂き、当区では月2回開催した。

浸水地域を含む高砂地区では毎年子育て支援ネットワーク会議を実施している。本来は関係機関の顔合わせを目的とした会議を年度初めに実施するが、平成23年度はようやく平成24年1月に開催できた。震災後どのような子育て支援をしてきたか、今後どのような支援につなげていくかを話し合ったところ、浸水地域の

(表 3)

**平成 24 年度高砂地区の子育て支援**

- 24.7 月 高砂地区子育てネットワーク会議
- 24.8 月 子どものこころの相談室・会場高砂版  
に向けて PR  
※出張こころの相談室(仮称)の開催と医師か心理士の巡回相談ができないかを係内で検討。
- 24.9 月 子どものこころの相談室 IN 高砂実施  
●厚生労働科学研究の一環として東北福祉大学臨床心理士の協力を頂けることになる。  
●国立精神・神経医療研究センターにより、母子保健係保健師へのグループインタビューを受ける。  
●臨床心理士と浸水地域に出向き、今後の事業を企画した。
- 24.10 月 臨床心理士と地区担当保健師が子育て支援機関3か所へ訪問。
- 25.1 月 地域の活動へ臨床心理士と保健師参加(餅つき会、乳幼児サロン、学童保育など)
- 25.2 月 高砂地区児童虐待防止ネットワーク会議

子育て支援者は自身が悲惨な状況を体験しながらも地域支援に取り組んでいた。

その後、社会福祉協議会が区内でサロンを実施していたので、浸水地域で実施する際には共催で、子どもと保護者を対象にした【パパママサロン】を3月に実施した。参加した保護者は、幼稚園、小学校区を選択するうえでの住居の悩み、気晴らしにショッピングをしても「他の人は被害をうけずに生活しているんだろうな」と思うと楽しめない等心の内を訴えていた。このサロンでは参加者からただ吐き出してもらっただけに終わったが、このような心の内を語る場の必要性と同時に、被災体験を受け止めるために保健師だけでなく心理職の同席の必要性を感じた。

(2) 平成 24 年度の取り組み

当家庭健康課で行う事業や、各子育て支援機関で行う行事は、通常に戻りつつある中で、【子どものこころの相談室】での相談は子どもの症状に加えて、母の不安・不眠・イライラといったものが目立つようになってきた。

平成 24 年度は、子育て支援ネットワーク会議は7月に実施した。会議の中では、浸水地域以外の高砂地区の震災による影響は薄くなってきているように思えた。しかし浸水地域では、親子の不安や問題をさぐっていくと、背景には震災の影響があることがわかった。そして子育て

支援機関の支援者は、自分自身も被災している中で、地域の親子むけや、仮設住宅にも対象を広げ活動を行っていた。

区役所で行っている【子どものこころの相談室】を平成24年9月に高砂保健センターで実施するにあたり、浸水地域の子育て支援機関7か所に、事業のPRと現状把握のために訪問した。各所、紹介したい親子がいることと、職員も被災しているために職員に対しても勧めたい、との現状で、相談日当日は親子、子育て支援者、合わせて5組の相談があった。また、相談としてではなくとも、そのような事業に興味を示した子育て支援者も来所した。

この頃から、地域の親子を支援していく上で、子育て支援者も気にかけていく必要があると感じた。すでにさまざまな事業に取り組んでいる関係機関に負担なく受け入れてもらいながら当課が支援していくためには、子育て支援機関の現行の事業と一緒に入らせてもらうことが大切と判断した。

平成24年9月からは厚生労働科学研究の一環として、東北福祉大学せんだんホスピタルやは一とぼ一との協力を受けて、せんだんホスピタルの臨床心理士と地区担当保健師と同行し、地域で開催できる行事や、既存の事業を巡回させてもらい、その中で回を重ねる毎に信頼を得ながら親子や支援者の相談に対応してきた。

子育て支援機関の実情把握		高砂地区担当保健師と臨床心理士が施設を訪ねて把握	(表4)
年月	目的	実状	
平成24年8月～9月	高砂こころの相談室の周知 (訪問数7施設)	相談室に進めたい人はいる。施設に出向いてくれるのはありがたい。	
		現時点では勧めたい人はいないが、高砂での実施は気持ちが楽。	
		積極的に勧めることで傷つくことも。他のチラシと同様に置いておく。	
		特に気になる子はいない。運営の悩みあり。	
平成24年10月～11月	臨床心理士の巡回相談について周知 (訪問数3施設)	2～3人心当たりあり。相談に行かなくても今後区に相談にのってもらいたい。	
		遊び場の問題、大人のかかわり方の問題、悩み多い。	
		浸水地区が今後どうなるのか？助けてほしいが放っておいてほしい。	
		専門への相談は意識の高い人のみ。住民特性を考えると足を運んでもらうほうがいい。	
		あらゆる被災者支援の研修は受けている。住民力を生かしたい。	

平成24年度子育て支援機関巡回相談				地区担当保健師が子育て支援機関の行事に参加	(表5)
年月	場所	行事名	参加者数	相談者数	
H25年1月	A子育て支援機関	餅つき会	約80名	6名	
	A子育て支援機関	幼児クラブ餅つき会	親子9組	4名	
H25年2月	F子育て支援機関	よちよちタイム	親子1組	5名	
	A子育て支援機関	0.1歳サロン	親子7組	7名	
	H子育て支援機関	子育てサロン	親子約20組	5名	
	C子育て支援機関	餅つき会	約290名	5名	
H25年3月	A子育て支援機関	親子遊びサロン	親子12組	5名	

## 平成24年度 地域を巡回訪問して(実態)

**住民の声**

- ・ 移転した住居には慣れてきているが、今後の永住先が決まらない不安あり。
- ・ 浸水地域以外の住民は落ち着きを取り戻しつつあるが、そこに移転した浸水地域の住民は「まだ落ち着かないの?」と言われることもある。
- ・ 余震やテレビのテロップには敏感になる。
- ・ 表立って震災ストレスの相談はしなくなっている。
- ・ 2年たってようやく吐き出している人、2年近く誰にも話せないでいる人。

**支援者の声**

- ・ 全体的には落ち着いてきているように思えるが、それは本当の姿なのか?
- ・ 問題の多い家庭はどこまでが震災の影響か?
- ・ 自分たちは地域のためにやれることをやっている、自分たちは大丈夫。
- ・ 先がどうなっていくのか不安。助けてほしいがかかわらないでほしい。

**保健師が感じたこと**

- ・ 2年たっても被害の大きかった地域の母子は、いろいろな不安を抱えている。
- ・ 住民はまたもとの地域の活気を目指してがんばっている。
- ・ 子育て支援機関が支援を拒む真意は何なのか?本当にいらぬのか?
- ・ 保健師として経済面等支援できかねる訴えは聞くだけでよいか?

## (3) 平成25年度の取り組み

平成24年度に引続き、子育て支援機関のさまざまな行事に、臨床心理士と地区担当保健師が参加していった。平成24年度当初、緊張が強く感じられた子育て支援者は、保健師を待ってくれるようになったり、子ども達を連れてきた保護者も笑顔や談笑が見られたり、実とは胸の内を話してくれるようになった。

平成25年度の子育て支援ネットワーク会議では、支援者の顔合わせと、「支援者自身を大切にするために」をテーマに、サロン形式で自由に話してもらった。津波浸水地域では、地域の親子の現状はまだまだ大変な状況が変わらずあることと、支援者自身が元気であることはこうして各機関が繋がり、共感し支えあうということが共有できた。

厚生労働科学研究事業として、平成25年3月「被災地を超え、子どもたちの幸せを願う研修会」を開催した。その中で、保健師自身の取り組みを振り返り、戸惑いや悩みを語りあった。この機会に、自分達の活動を肯定的にうけとめることができ、地域に定期的に出向く活動を続けていいと確認できた。(支援経過については表2～7、表11参照)

## 平成25年度子育て支援機関巡回相談

地区担当保健師が子育て支援機関の行事に参加

(表7)

年月	場所	行事名	参加者数	相談者数
H25年5月	C子育て支援機関	子育てサロン	親子5組	2名
H25年6月	C子育て支援機関	子育て支援クラブ	親子4組	2名
H25年9月	C子育て支援機関	子育てサロン	親子2組+小学生5名	3名
	H子育て支援機関	子育てサロン	親子24組	5名
	C子育て支援機関	子育てサロン	親子5組	3名
H25年11月	E子育て支援機関	親子クラブ	親子13組	7名
H25年12月	A子育て支援機関	親子遊びサロン	親子11組	3名

#### 4. 現在の親子、地域の姿（平成 25 年 10 月）

##### (1) 保護者の様子

(表 8)

今みえる母子の姿(平成25年10月現在)  
**浸水地域の大人たちは……**

- テレビのテロップや揺れにはまだ敏感に反応。
- 仕事が変わった、仕事がない、生活リズムの乱れ、子どもに手をかけられない。
- ストレス相談よりも生活再建。
  - 体の不調は相談するほどでもない。
  - 相談しても仕方がない。
  - 辛さはみんな一緒だから。もっと辛い人がいるから。
- 町内で楽しめるイベントに力を注ぐことができる。
- 自ら新たな生活の場を再建してきている人も増えてきている。
- 破産覚悟で移転する人もいる。
- 移住先の住民（浸水地域以外の住民）からは、まだ落ち着かないの？と言われることも。

同じ町内でも将来の見通しが持っている人とそうでない人が混在。  
 幸せ比べの壁が出来ている。

当区の健診時に取り入れていた【こころとからだの相談票】は平成 25 年度も引続き実施している。保護者の有所見率は震災直後からあまり減少はみられていない。慢性的にストレスをかかえることが多い世代ともいえるが、年齢が高い子どもの保護者に「いろいろと不安」「ちょっとした物音や揺れに対しひどく驚いてしまう」と言う項目が高率である。

区全体を対象にしている幼児健診では、震災の影響が一見薄れてきているようにも見える。浸水地域の行事等で親子に会うと、初対

面の母同士顔を合わせると挨拶のように「津波どうだった？」というやりとりが今でもあること、相変わらず続く余震に不安を感じていること等、あらたまった相談場面ではなく、ふとしたタイミングで地震に関する不安を語る機会があることから、まだまだ影響は潜在していることを感じる。しかし、多くの保護者達は毎日いつも大変な気持ちだけで過ごしているわけではなく、楽しめる時間を感じる事が出来たり、希望が持っている人がいるのも現状である。地域によっては、生活再建に見通しが持てない人と、比較的希望が持っている人が、道路一本挟んで同町内にいるため、以前からの行事やそのための話し合いなどが持ちにくくなっている、関係がぎこちなくなっている、という話も聞かれる。一見、生活再建にむけて動いているように見える世帯も本音を語れば「破産覚悟での移転である」という本音も聞かれる。

##### (2) 子供達の様子

(表 9)

今みえる母子の姿(平成25年10月現在)  
**浸水地域のこども達は……**

- もともとの問題がより大きくなってきた。
- 震災を経験していない乳幼児も、親が不安定だと夜泣きや怖がり等がみられる。
- 友達が勢よく走っている姿をみても津波を連想する子どもがいる。
- 家に親がいない。遊ぶ友達がいない。遊ぶ場所がない。
- 生活スタイルが変化した親が苛立ち、子どもはそれを見て生活している。
- 未だ仮設住まいの子どもを、友達らが興味の対象としている。
- 中高生が不安定になってきている。

子どもからみて、家庭が必ずしも安心できる場所ではなくなった。  
 転校したり学校がなくなった子どもは新たに安心できる場が必要。

幼児健診の【こころとからだの間診票】からは子どもの有所見率は年々減少している。健診では「親にしがみついてはなれない、後追いがひどい」「必要以上に怯えたり、小さな物音にびっくりする」という項目が高率である。

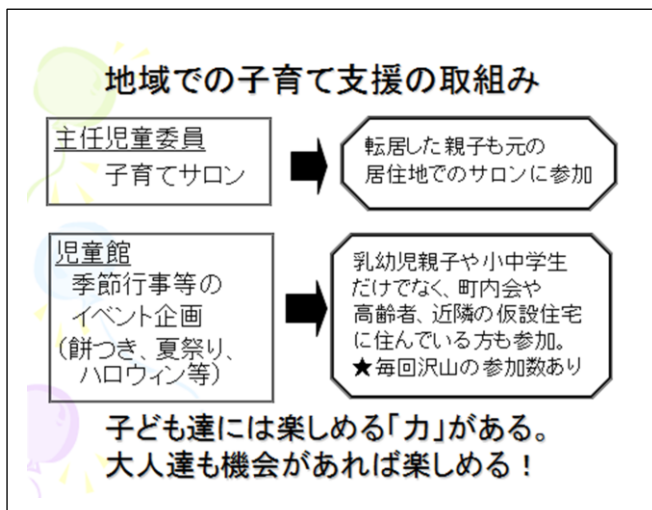
症状を表している子どもについてよく話を聞いてみると、保護者が強く不安を持っていることが多い。狭い仮住まいの家では保護者の苛立ちや喧嘩も、子どもによく聞こえていることも一つの要因ではないかと

思われる。大きく被災した小学校の学校保健委員会では、むし歯の有病率が震災後急増した報告があった。保護者の生活スタイルが変化したために十分子どもに手をかけられていないこと

が要因と思われる。また、幼児健診で健診対象児の上の兄弟のことを相談するケースも見られる。震災直後からは特に大きな変化もなく過ごしてきた子ども達が、ここに来て些細なきっかけで気持ちが落ち込んで、立ち直りが得られにくくなってきているようだ。

浸水地域はもともと比較的大きな住宅が多かった地域である。それゆえに現在の仮住まいは物理的にも過ごしにくく、保護者が苛立ちをみせると子どもに影響が届きやすく、家庭が安心の場といえなくなっているのも現在の状況かと思われる。

(3) 地域の取り組みと親子 (表 10)



地域では、さまざまな子育て支援者が、地域の子ども達を元気にしようといろいろな取り組みを実施している。被災のため移転した親子も、元居住していた地域に帰ってきて行事に参加している。乳幼児の親子のみ対象にする行事ではなく、地域住民、仮設住宅に住んでいる人、高齢者の方々も一緒にどうぞと取組んでいる。そのような行事は震災後増えてきており、毎回 100 人以上の参加があり、さまざまな年齢の方々が交流するきっかけになっている。このよう

な企画をとおして、辛い経験をしてきた子ども達も、行事に参加すれば楽しむことができる、このような“楽しむ力”があるということをととても実感できる。

震災から 2 年半をむかえた平成 25 年 9 月 11 日、浸水地域の 6 ヶ所の児童館合同で開催された【子育て応援フェスタ】では児童館の職員だけでなく、地域の老人クラブや民生委員等をスタッフに加え、スタッフ 178 人、参加者は 300 人を越えた。当課も参加し、乳幼児の身体計測をしながら子ども達の成長を共に喜んだ。イベントを中心的に支えた子育て支援者は、被災の大きかった子育て支援機関でもあり、子ども達や保護者の笑顔に包まれた今回のフェスタの開催を、震災当時は予想もしていなかったと涙を流し、互いに元気付けられたようだった。

## 5. まとめ・考察

近年の保健師活動は、被災者支援も含め困難事例も多く発生しており、ハイリスクアプローチがメインになっている傾向がある。震災後の支援も、生活面の問題や精神面の課題などが大きく浮上してきた人に対して支援をしてきた。母子保健係も幼児健診や個別相談で訴えのあった方、また来所時に支援が必要と判断してかかわってきた。

地域住民も震災後 2 年半経過し、あらたまって震災のストレスと訴えてくる人は減っている。子育てのし難さや苦しさを感じても、震災後の影響とは結び付けがたく、相談することをためらい、問題をかかえている。そういう声を身近な子育て支援機関は聞いていて、また子育て支援者も対応に苦慮している。

支援者として「子育て支援のために何ができるか。」「何かをしなければいけない。」被災者の心のケアとしてそう模索していた。しかし、住民や子育て支援機関から求められていたことは何かをしてもらうことではなく、「地域に来てもらいたい。」「とにかく現場をみて感じてもらいたい。」ということだった。行事の大小にかかわらず、足を運び、共に楽しむことで、住民からは「保健師ってこういうこともするんですね」と声をかけられたり、子育て支援者からは「待ってました」と迎えてくれた。保健師が思う以上に、子育て支援者や住民は保健師を待っていた。そのように住民と子育て支援機関と距離を縮めたことで語られた話もあったと思う。区役所で待っていただけでは見えなかった本音もその中にはあったと感じる。

大きな災害や問題が発生すると、住民だけでなく、さまざまな関係機関も混乱する。そこで生きてくるのが普段からのつながりであり、顔の見える関係である。今後もいつ起こるかわからない災害に備えてできることとして、各地区担当保健師には健康度の高い親子や子育て関係機関とも大切に関係を築いて活動していくポピュレーションアプローチの必要を感じた。

## 6. これからの支援

今後は、仮設住宅からの移転等、住民の生活に動きが出てくる時期である。宮城野区にも復興公営住宅等の整備により、新たな「町」ができる。一見、これで安定したように見えるかもしれない。しかし環境の変化がもたらす影響、保護者も子どもも不安定になることも予測できる。ここに、生活が安定する人、そうでない人が混在する。新たな地域で孤立した子育てにならないよう、関係機関とも連携しながら人と人をつなぐ支援を考えていきたい。今後も幼児健診や地区活動の中でお会いしていく親子に対して、一人一人丁寧に、アンテナを高くもって、どんな場面でも不安の表出があった際には受け止めていくよう、よりいっそうきめ細やかな対応が重要になってくるであろう。

子どもをささえているのは保護者であり、子ども達同士である。子ども達や保護者をささえているのは教育の場の先生や地域の子育て支援者、地域の方々である。そのような方々を支えていくのも我々の役目ではないかと思う。これからも、親子を支えていくために、今までの繋がりを大切に、地域に出向いていきたい。

今回の活動にご協力いただきました、国立精神神経医療研究センター、東北福祉大学せんだんホスピタルの皆様にご心から感謝申し上げます。

宮城野区浸水地域の子育て支援の経過		フェーズ							フェーズ5 復興対策 概ね1年以降		
フェーズ0～2 初動体制の確立 緊急対策・応急対策 概ね24時間～2週間		フェーズ3 応急対策 3週間～2ヶ月まで	フェーズ4 復旧・復興 対策 2ヶ月以降	8/11	9/11	10/11	11/11	H24.1/11～3/11	H24年度	H25年度	
子育て支援活動	避難所	健康相談	→								
	浸水地域 地区支援者への訪問	全国からの応援	→	浸水地域ローラー作戦(全戸訪問)							
	プレハブ仮設 (健康状況調査)		→					プレハブ仮設にて健康調査後継続支援	→	宮城県健康調査後フォロー	
	民間賃貸仮設 (健康状況調査)							母子保健継続支援	→		
	幼児健診等							1.6、2.6、3歳児健診開始 他区から保健師応援 → 4か月児育児教室開始	→	→	
	子どものこころの問診票							全幼児健診対象に導入	→	2.6歳児健診、3歳児健診に導入	
	子どものこころの相談室				8月こころの相談室開始 (月2回)				(月1～2回) 9/16高砂保健センター会場	9/12高砂保健センター会場	
	子育て支援ネットワーク会議 主任児童委員、保育所、児童館等								2/22高砂地区 31名参加	7/18高砂地区22名参加	7/12高砂地区27名参加
	児童虐待予防ネットワーク 会議 学校、警察、主任児童委員、保育所、児童館等								1/13高砂地区 25名参加	2/25高砂地区25名参加	10/2高砂地区29名参加
	高砂地区子育て地区活動								3/5パパママサロン開催 地区子育てサロン再開		9/11たかさGo子育てフェスタ
支援者等支援	厚生労働科学研究 母子保健コンサルテーション								9月第1回グループインクル 10月～子育て支援機関等巡回 相談開始(保健師、臨床心理士) 第2回グループインクル 3月「被災を越え、子どもたちの幸せを願う研修会」	→	第1回グループインタビュー